

山下絢著『学校選択制の政策評価—教育における選択と競争の魅惑』勁草書房 (2021)

川上泰彦

兵庫教育大学 ykawa@hyogo-u.ac.jp

本書は、公立義務教育学校における学校選択制を扱っているが、その最大の特徴は「学校を選ぶ側」である児童生徒（保護者）の視点と「選ばれる側」である教師の視点の双方について、マイクロデータ（個々人の行動・判断等に関するデータ）の計量分析を行なっているという点にある。学校選択制の理念や政策の是非を扱うのではなく、制度下で各関係者が何をどのように判断し、行動しているのかを明らかにしている。

このうち前半部（第1章から第3章）では保護者を分析の対象としている。第1章では、保護者は私立学校・指定公立学校・選択制学校という3つの選択肢に対して、どのように学校選択を行なっているのかを分析し、これらが並立的構造であることを示している。また私立学校の選択と公立学校の選択とで、進学先の学校に対する期待が異なるという点も明らかにした。第2章では、学校選択を通じて各学校ではどのような特徴のある児童生徒集団が構成されるのかを分析し、特に小学校においては、希望申請者数の多い（校区外から多くの進学希望者を集める）学校における、保護者の教育期待の高さが示された。そして第3章では、学校選択を通じて保護者が「集まる」ことによって、何らかのソーシャルキャピタルが構築されるのかについて分析し、特に小学校では、学校選択を行なった保護者は学校への関与意識が高まる傾向にあることが示された。第2章と合わせて考えれば、学校選択として発露している保護者の教育期待が、学校参加における責任意識に（部分的に）つながっていることを示す結果となっていた。

続いて後半部（第4章および第5章）では教師を分析対象としている。第4章では、学校選択を通じて教師間、教師-保護者間に关系的信頼が構築されるかどうかを分析したが、希望申請割合の高い学校において教師と保護者の关系的信頼の構築が進む、という結果は得られなかった。第2章・第3章で得られた知見との関係性が気になる結論となっていた。第5章では、各学校の児童・生徒がどのような学校選択をしているのかが、各校に勤務する教師の職務満足にどう影響するのかを分析し、特に小学校では、希望申請割合が低い学校において職務満足度が高まりにくい構造が明らかにされた。これらの実証に加えて、6章ではアメリカにおけるチャータースクールの研究動向を整理し、教育機会の配分に関する効果検証の課題を論じている。

本書において評者が最も興味を持ったのは第1章であった。とはいうものの、この章が分析したような、公立・私立を並列した小中学校の選択は、品川区のごく限られた都市部において成立するため、そのままでは知見を敷衍できる範囲に制約がある。これに対して筆者は、もしこの章の関心をそのままに、分析対象を高等学校への進学行動に発展させた場合、公立・私立の選択に関する分析がより広域に敷衍できるのでは

と考えた。特に近年の政策動向（高等学校における修学支援制度の拡充等）は公立・私立の進学選択に何らかの影響を与えていると考えられるため、それらのインパクトを探る必要があるものの、そうした研究はまだ見られない。この点で、本書の第1章の分析は極めて先駆的であり、研究対象を広げた発展が期待される内容であった。

一方で、いくつかの章の分析におけるデータセットや概念の扱いについては、更なる説明や丁寧な取り扱いが必要に思われた。

たとえば第1章における公立学校選択の分析では「選択の結果、自校区の学校に進学する」という行動と「特に選択を行わずに自校区の学校に進学する」という行動が区別できていないように思われた。もし何らかの処理をしてこれらを区別しているのであれば、その点の説明が必要ではないかと思われた。また第3章における「フリーライド問題」については、何に関するフリーライドかが明示されておらず、具体的に保護者にとってのどういった期待（やそれに基づく行動）をフリーライドと規定しているのか、量的調査との関係性を補足してもらえると、より理解が深まったように思われた。さらに第4章で使用したアンケートの調査項目は、「協力が広まった/深まった」など、一定期間同じ学校に在籍するなどして、変化が観察できる条件の者しか回答し得ないはずの設問が使われており、このあたりについて量的調査における観察と概念の整合性をどう扱ったのか、より丁寧な説明があった方が良かったように思われた。

とはいうものの、いずれも制約のあるデータセットによる分析ゆえの限界であることも確かであり、もし筆者の意図するデータセットで分析ができれば、どんな知見が見出せるのかという点を期待させるものでもあった。この点は、ぜひ今後の研究活動に期待したい。

あわせて、個々の分析の体系的なまとめや解釈が読みたかった、というのも読後感として指摘しておきたい。

たとえば第2章と第3章と第4章は、「希望して学校を選ぶ」という行動が集成的になされることで、それが学校・教師の関係醸成にどう影響するかという点で、是非総合的な知見を提示してほしいところであった。また、本書の一連の分析が研究上・実践上どのような知見を提示するのか、たとえば、品川区のような都市部という条件がどう引き取られ、さまざまな地域における学校選択についてどのような示唆を与えるのかといった実践上の含意や、学校選択に埋め込まれている理論的な課題について、本書がどのような知見を提示したのかといった研究上の含意があると、読者にとって知見の整理がスムーズだったものと思われる。

多分に評者の不勉強ゆえの要素も大きいことは自覚しつつ、各章の実証を総合するような総括的な発信についても、今後は期待したい。

以上、いくつかについて気になる点を指摘はしたものの、本稿冒頭に挙げた通り、マイクロデータを使った学校選択制の効果検証というモチーフは挑戦的であり、本書の価値は高い。会員諸氏にもぜひ本書を手にとっていただき、評者含め読後感や学びの交流をしたいと思います一冊であった。